

# Quartet Chronicle

reid

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

光り輝く奇跡の結晶クリスタル

忌むべきモノを封じた忌まわしい月

四人の少年少女はこの二つの存在のぶつかり合いに必然的に巻き込まれる。

四人はどんな道を歩むのか・・・

未来は誰にも解らない。

# 目次

## 第一章

小さな冒険

1

幼き刃

8



# 第一章

## 小さな冒険

クリスタルによつて？ 栄している世界《イリクティブ》この世界には人々からはオリジンクリスタルと呼ばれる物と、そのオリジンクリスタルを模倣し複製したクロムクリスタルというものが存在する。オリジンクリスタルは扱いが容易ではなく加工も困難であるが、多大な魔力を保有する上に鋼を遥かに超える硬度を誇る。クロムクリスタルはオリジンクリスタルと比べると保有している魔力の量、硬度については圧倒的に負けてしまつてはいるが、その分扱いやすく加工も比較的容易である。基本的に世に出回つてゐるのはクロムクリスタルであり、この世界の生活の半分はクリスタルによつて支えられてゐる。そしてクリスタルの始まりでもあるこの世界に住む者なら老人から子供まで知つてゐるあるお伽話が存在する。

「ある昔のお話、太陽が月に隠された日に、あるモノが現れた。それは全てを破壊し、紅に染めた事から人々から『紅に染めるモノ』と呼ばれ恐れられた。ただ世界が滅んでゆくなか、光を放つ結晶を持った四人の若者が現れた。若者は四人で力を合わせて『紅に

染めるモノ』を『月』へと追いやり封印した。封印した後、若者は封印に使用した結晶を世界各地に残して去って行った。人々は若者達を英雄と称え彼らが持っていた結晶を『クリスタル』と呼び信仰した。」

この物語はこのお伽話にある月に封じられたモノを甦らせようとする者達と英雄と呼ばれた若者達の持っていたクリスタルを持つ少年少女達の話である。

都市から少し離れた場所にある小さな村《バスティア》既に朝を迎えたその村の小屋の中にまだ朝を迎えていない少年が居た。

「う〜ん・・・」

少年は窓から零れる日差しを浴びて少し目を開けるがすぐに布団の中に潜ってしまふ。本来人にとっては気持ちのいいものであるはずの朝の日差しも、少年にとっては安眠を妨害する忌々しいものでしかなかった。

「あとつちよとだけ・・・」

布団に潜った状態のままもう一度眠ろうとする少年だったが、その安眠は小屋のドアを勢いよく開ける音により妨害される。

「あー！ユーリイまだ寝てる！」

突如小屋に入ってきた少女はユーリイの寝ているベッドまで駆け足で近寄る。ユーリイは音を聞いて察したのか身を守るように布団をかぶりながら丸くなる。

「ゆくりいく？いつまで寝てるつもりなのかなく？」

「ここにはユーリイなんて人は居ません・・人違いです」

バレバレな嘘について誤魔化そうとするユーリイ。だが少女は意外とすんなりその場を後にしようとする。

「あ、そう。それならおばさんの特製オムレツユーリイの分も私が食べるから」

「なあっ!？」

それを聞いた途端さつきまで布団に包まっていたユーリイが飛び起きる。眠気よりも食い気が勝った瞬間である。

「ほら、やっぱり寝てた！ユーリイの嘘つき！」

「あ・・・ひ、卑怯だぞユズ！」

我に返り再び布団に入ろうとするユーリイをユズは逃がさなかった。そのままユズに連れ去られるような形でユーリイは外に出る。

外まで引つ張り出されたのはいいが、寝起きのユーリイにとって朝の日差しは殺人光線に等しいものだった。ユズに引きずられながらもユーリイは悲鳴を上げる。

「目があ！目がああああ!!」

「大丈夫だ、問題ない。と、いうわけで行くわよ！」

ユーリイが居た小屋から少し離れた所に一人の男性が薪を割っていた。男性はユー

リイの悲鳴が聞こえると、やれやれといった感じで二人の所へ歩いていった。

「ユーリイ、男の子だろう？そんな情けない声を上げるな」

「ぎゃあああ……て、父さん」

「あ、おじさん、おはようございます」

ユズは男性に対してお辞儀をする。彼はユーリイの父親のグレムⅡエルシア。この村の村長であり剣の達人でもある。ちなみにユズは幼子の頃に彼に拾われた過去を持つ。

「ユズ、いつも言っているが別にそんなにかしこまなくてもいいんだぞ？」

「いえいえ、私がやりたくてやっているのでお気になさらなくてもいいですよ？」

「む……」

グレムはほんの少しだけ困った表情を浮かべた後、小さな溜息を吐きながら二人の背中を押す。

「さあて、マテイエが朝食を作っているはずだ、待たせるのは失礼だぞユズ、ユーリイ」

「それくらい分かってるよ、父さん」

「そうだよね、ユーリイはおばさんの作るオムレツの為に起きたんだもんね？」

ユズに耳元で囁かれた途端に、ユーリイの顔が真っ赤になる。

「ゆうううずううう!!」



「わーこわーい」

くすくす笑いながら逃げるユズを顔をユーリイは真つ赤にしながら猛ダツシユでユズを追いかける。そんな二人を猫のように摘み上げるグレム。そして三人で小屋に戻ると一人の女性が鼻歌を歌いながら料理をテーブルにならべていた。

「あら、みんな揃ってどうしたの？」

「いや、待たせたら悪いと思つてな」

「隣の寝坊野郎を起こしてました」

「おい」

ユーリイとユズの小さな喧嘩が起こる前に微笑みながら二人をたしなめる女性の名前はマティエールシア。ユーリイの母親であり、グレムの妻である。

「まずは朝ご飯を食べましょう？ね？」

「・・・わかった」

「はーい」

この朝食でユーリイがオムレツを食べ過ぎたせいで卵が尽きかけたのはまた別のお話。

朝食を食べ終わり、一息ついたユーリイはふと疑問に思ったことがあった。

「ユズ、そういえば何所に行く気だったの？」

「はあ？何よそれ、言いだしつべはユーリイのくせに」

ユズの口から予想外の答えを出されて目を丸くするユーリイ。ユズは呆れ果てた感じでユーリイに質問する。

「村の外れの森を探検するって言ったの何所の誰？」

「僕だけど？」

「明日行くから寝坊するなって昨日言ったのは？」

「僕だね」

「・・・」

ユーリイが答える度にユズのこめかみがびくびくと脈打つ。

「じゃあ今朝早く森に探検に行く筈が寝坊してその事を忘れちゃった馬鹿は誰かな？」

「うん、僕だ!!」

「歯あ食いしばれ」

渾身のドヤ顔で答えるユーリイの顔面に全力の右フックが襲い掛かる。歯を食いしばる前にそれが直撃し、ユーリイは空を舞う。

「行くわよ？」

「はい、すみません」

改めて村の外れの森に行くために二人で準備をする。お菓子、飲み物他にも色々バツクに詰め込んで、グレムとマテイエに出かけることを話して二人は森へと出発する。

「遅いよユーリイ、おいてくよ?」

「ユズが荷物持たないからだろう!?!」

## 幼き刃

緑が生い茂る森の真ん中ではしやぎまわる二人の子供、ユーリイとユズは木々の間を駆け回る。ユーリイの父のグレムの狩場であるこの森は、いつもグレムの狩りについていつてたユーリイにとっては大きな庭みたいなものである。魔物も臆病な奴が多く、狩りに来るグレムを恐れて逃げ出すものが殆どである。

「遅いよユズー！」

「ちよつと待つてよユーリイ！」

ユーリイは余裕の表情で森の中を駆けるが、ユズは木の根につまづきながらふらふらとユーリイを追う。

「どうしたのユズ、もしかしてバテた？」

ユーリイは少し先の小さな丘の上で意地悪そうに笑う。

「う、うるさい!!私よりも力ないくせに!!」

「それ今関係なくない!!」

ユズはユーリイを睨みながら彼のいる丘まで一気に駆け抜けようとするがまた木の根につまづき今度は転んでしまう。グレムの狩りについていったことのないユズは森

に慣れておらず、ここに来るまでに彼女が転んだ回数は既に十回を超えている。

「うぐう・・・ユーリイより体力あるはずなのに・・・」

「そりゃあんなにつまずいたり転んだりしてたら疲れるよ」

「うるさーい!!」

ようやく丘にたどり着いたユズは丘の上により登る。

「手、貸そうか？」

「いらぬい！」

上からユーリイが手を伸ばすがユズはその手に噛み付く。こうかはばつぐんだ。

「いてっ!?なにすんだよユズっ!」

「うるふあい！」

ユズは手に噛み付きながら上まで登りきる。ユーリイは放してもらうために手を振

り回すがユズはなかなか放さない。

「ふゆーりいのふへにい!!」

「いだだだだ!やめろお!はなせえ!!」

このユーリイの手に噛み付いた状態からユズが放してくれるまで、約三十分の時間が  
必要だった。

ユーリイは涙目になりながら自分の手の無事を確認する。

「本気で嘔み付くことないだろ・・・」

「つべこべ言わない！それよりユーリイ、お腹空いたー」

ユズはそう言いユーリイの背負っているバックを指差す。そのバックは村で大量のお菓子などを詰め込んであるものである。

「うん、僕もお腹空いちやったよ」

「え、ユーリイも食べるの？」

「流石にもう僕泣いていいよね？」

本気で泣きそうなユーリイを無視してユズがバックの中身を漁る。だがいくら中を探してもお菓子が出てこない。

「んー？」

不思議に思いユズがバックの中を開けると血の匂いがユズの鼻を刺激する。

「なんじゃこりゃああ!!」

バックの中に入っていたのはお菓子ではなくグレムの使用する狩猟道具だった。

「ちよつとユーリイ!?!これどうゆうこと!?!」

バックを背負ったままの状態のユーリイに問い詰める。だがユーリイはきよとんとした顔でユズのほうへ振り返る。

「なんだよいきなり怒鳴りだしてさあ」

「私のお菓子が入ってない！っていうかこれおじさんのじゃん!? 私のお菓子はどこお!」  
言ってることの理解ができないユーリイだったが自分がバックの中身を見てようやくユズの言ってたことを理解する。

「なんじゃこりゃ」

「それさつきやつた。それ・よ・り・も!」

「ひよ?」

ユズはユーリイを掴み上げて騒ぎ始める。お菓子がなかったことが相当ショックなようだ。

「こおの馬鹿ゆうううりいいいい!!」

「ぎゃああああ!! やめてください死んでしまいます!!」

ボコボコにされながらなんとかユズを落ち着かせたユーリイは改めて自分の持ってきたバックを見る。

「形が似てるから間違ったのかな?」

「確かにおじさんの持つてるバックと私たちが使うバックって似てるよね」

「うーん、どつちにしろこりゃ村に戻ったほうが・・・」

気を取り直してどうしようか話し合おうとするユーリイとユズだが、それを魔物のうめき声が遮る。

「ウソ・・・ま、魔物!?!」

狼の姿をしたその魔物はゆっくりとユーリイ達に近付いてくる。

「ファイアーウルフ?ここら辺の魔物は父さんがあらかた狩ったはずなのに・・・?」

グレムの狩場でもあるこの森は魔物の数が極端に少ない、仮にいたとしてもグレムをはじめとする人間を恐れこうして敵意を向けてはこない。彼らに大人と子供の差が理解できていなければの話だが。

「逃げよう!!このままじゃ食べられちゃうよ!?!」

ユズがユーリイの服の袖を引つ張るが、ユーリイは動かない。

「なにしてんのよ!本当に食べられるわよ!?!」

「父さんから聞いたことがある。ファイアーウルフは臆病なやつだけど足はかなり速いって・・・だから逃げてても多分無駄だと思う」

そう言いながらユーリイはバックを下ろす。その腰の後ろには布で巻かれたなにかがくくり付けられていた。

「どうせ逃げられないなら・・・」

ユーリイはその巻かれた布を外す。それとほぼ同時にファイアーウルフも襲い掛かる。

「やるしかない!!」

襲い掛かるファイアーウルフにユーリイは布から外されたそれを力任せに振り回す。



その一撃でファイアーウルフの左前足は切り裂かれる。

「あ、それって……」

ユズがユーリイの持っている物を指差す。それはグレムが狩りに使用している狩猟刀だった。

「おじさんの狩猟刀じゃん?!」

「うん、村から出るとき置いてあったからさ」

「それって泥棒……」

ユーリイは聞こえない振りをしながらファイアーウルフのほうを警戒する。ファイアーウルフは左前足を深々と切りつけられているがまだ敵意をむき出しにしている。

(……おかしいな、父さんの言ってたことと大分違うぞ?)

ファイアーウルフは基本狩りはしておらず、食べるものは他の魔物の食べ残しや死肉が主である。そして自分より体の大きいやつに対してはそもそも姿すら滅多に見せない魔物のはずなのだが、ユーリイ達の目の前にいるファイアーウルフは二人とあまり変わらない大きさのほすなのに敵意を出している。

「とにかくなんとかしなきゃ……!」

再度襲い掛かるファイアーウルフの頭に真上から狩猟刀を振り下ろす。

「……ッまだ浅い」

今度は右目を傷付けるがまだファイアーウルフは倒れない。

「しぶといなあ……」

ユーリイが小さく溜息を吐いたその直後、ファイアーウルフの小さな悲鳴と共に肉が潰れる音と骨が碎ける音が同時に響く。

「え……?」

「ウソでしょ……今度はこいつなの?」

後ろで見ていたユズは状況を理解すると同時にその場で腰を抜かす。そこにいたのは亜人の魔物であるゴブリンであった。

「……冗談でしょ?」

ゴブリンはたった今食料と化したファイアーウルフを首から掴み上げてその腹に噛り付く。そのまま肉を食い千切りむしゃむしゃと食事を楽しむ。その光景にユーリイも思わず数歩下がる。

「ユーリイ……もう逃げよう?いくらなんでもヤバイって……」

ユズは小さく囁く。

「そうだね……さすがにこいつはヤバイよ……」

幸いにもゴブリンは殺したファイアーウルフを食べるのに夢中である。だがそれは『ファイアーウルフと大して変わらない大きさの自分らも捕食対象の可能性がかなり高

い』という意味づけでもあった。

「ゆつくりここから離れよう、あいつ多分僕らに気付いてない」

「目が悪いのかな？」

「いや、単純に鈍感だしそもそも知能低いつて父さんが言ってた」

「親は偉大」

二人はできるだけ音を立てずにその場から離れようとするが、足元を見てなかったユズがまたしても転んでしまう。

「……？」

その音を聞いてゴブリンが二人の方に振り向く。

「あつ……馬鹿っ！」

「う、うるさ……あ」

二人がゴブリンの方を見るとそこには『新しい食料が見つかった』と言わんばかりの気持ち悪い笑みを浮かべたゴブリンがそこにいた。

「……やばい、逃げ」

その一言を言い切る前にゴブリンが走り出す。左手にさつきまで食べていたファイアーウルフを、右手にはそのファイアーウルフを叩き潰した冒険者が持っていたであろう大剣を持ちながら。

「ゲギヤギヤギヤ!!」

ゴブリンはその右手に持つ大剣を振り下ろす。

「あ……」

「……ツ!!ユズツ!!」

ユーリイは転んで体制を崩してしまったユズを咄嗟に抱えてその一撃をかわす。だがその瞬間自分達がいた丘の岩があっさり砕けてしまう。

「そんなのアリかよ……」

目を丸くしてその自分達が居た場所を見る。力だけの一撃だがこれをくれば子供  
の体など一瞬で挽肉になるだろう。

「やるしかないのか……!?!」

覚悟を決めて狩猟刀を構えるユーリイ、だがその直後

「だ……」

「ん?ユズー」

「だあらあつしやああああ!!」

ユズがゴブリンに向かって物凄い勢いで走りだす。

「な、なにやっつてんだよユズっ!?!」

「ゲゲツ」

ゴブリンは変わらず気持ち悪い笑みを浮かべながら右手に持つ大剣を振り回す。  
「そんなの当たって死んだらどうする!？」

ユズはそれをゴブリンの足元にスライディングしながら避ける。

「ゲギャ?」

「喰らえ!!ポケットハック!!」

そのままユズはゴブリンの膝裏を渾身の力を込めて蹴りぬく。

「グゲツ!」

ゴブリンがふらついたところをさらに石で頭を殴り追撃する。そのときの衝撃でめまいを起こしたのか大剣を落としてしまう。それをすかさずユズが拾う。

「どうだ!!」

「ポケット何所!？」

「そこっ!？」

その大剣を持ってユーリイのところに行こうとしたユズだが、子供にはかなり重いらしく引きずりながらになってしまっている。

「さすがに・・・重い」

「ユズよりは軽いよ」

「頭カチ割るわよ」

「すみませんした」

ゴブリンは頭を抱えて二人を睨む。左手に掴んでいたファイアーウルフを投げ捨て襲い掛かる。

「ゲヒャア!!」

ゴブリンはその汚い爪で引つかこうとするが、二人は横に転がるように避ける。

「やああああ!!」

転がった勢いを利用してユズがゴブリンから奪った大剣を振り回す。だがそれでも大剣は重く、その切っ先は下へと落ちてしまう。だが

「ギエエエエエ!」

何とかギリギリでゴブリンの細い足に直撃する。その切れ味のない刃では肉を切ることはできなかったが骨にダメージを与えられたようだ。

「ギャギャギャギャギャ!」

足の骨にひびが入ったのかもがき苦しむゴブリン、その痛みでユーリイの持つ狩猟刀の刃が目前まで迫っていることに、ゴブリンは喉を貫かれるまで気付かなかった。

喉を貫かれてその場に倒れるゴブリン、倒れたのを確認して二人は同時に腰を抜かす。

「危なかったあ・・・」

「もうダメかと思つたよ……」

気付けばすつかり夕暮れ時である。

「あ……早く帰らなきゃね……」

「うん……そうだー」

「ギギギ……」

二人が安堵の溜息を吐いて帰ろうとすると、倒れたはずのゴブリンがまた立ち上がっていた。

「え……?」

「そんな……」

二人にもう戦う力はない。そんな二人にゴブリンの爪が迫るその刹那。

「その子達に手を出すな……」

その場に駆けつけたグレムがその爪を剣で受け止める。その顔は鬼のように険しい。

「ゲヒユ?」

「……一閃!!」

グレムが剣を一振りするとゴブリンの首がすでに地面に転がっていた。

「お前達、無事か?」

グレムはすぐに二人の方へ駆け寄る。先程の険しい表情はない。

「うん・・・大丈夫」

「そうか、すまないお前達の帰りが遅いから探しに来て見れば魔物に襲われているのだから正直心底肝を冷やしたぞ?」

「うう・・・ごめんなさい」

グレムは溜息を吐きながら二人の手を握る。

「私の狩猟刀を勝手に持って行ったのは褒められた行為ではないが・・・いや、それよりも無事で何よりだ」

「父さん・・・」

「帰ろう、マティエも待っている」

「うん!!」

二人はグレムに手を引かれながら森を後にする。ただグレムは考え込んでいた。

(凶暴化した魔物・・・やはりこの子達の持つこれのせいか?それとも・・・いや、それはないか)

グレムは途中で考えるのをやめて二人を抱える

「どうしたの おじさん?」

「いや、お前達もう疲れただろう?私が負ぶって行こうとしてるだけだよ」

「大丈夫父さん?ユズ重くない?」



「いてまうぞこんにやろう!!」

その一言を聞いた瞬間ユズは暴れだす。

「やめろやめろ、落としていまうぞ?」

「いいよ、ユーリイだけ落としても」

「ヤメテ!!」

二人（主にユズ）が暴れまくったおかげで三人が村に着いたのはもう夜中であつた。家の前にはマテイエが怖い微笑みを浮かべて待つていた。

「あら、みんな遅かつたわね?」

「あ、ああすまない」

「後でコブラツイストの刑ですね〜」

「頼む、それだけは勘弁してくれ」

グレムは既に眠ってしまった二人を見てからマテイエに言う。

「やはりこの子達にはこれの使い方を学んでもらわなければいけないようだ」

「やはり・・・ですか」

「明日、二人を中央の都市に連れて行く、そこで私の知り合いに使い方をあらかた教えてもらおう」

グレムは二人をベッドに寝かせる。

「そう・・・なら」

マティエはグレムの体を掴み一瞬でコブラツイストの形に持っていく。  
「な・・・待ってくれ、マティエー」

その後グレムの悲痛な叫び声が村中に響いたという。